追憶　作詩：松山　律子（68 才）

私が貴女と出逢ったのは舞台の上だった
ここは私が立つ場所じゃない　早く帰りたい
周りの雰囲気にリハーサルから心臓バクバク
そんな私の耳元で貴女がソ～と囁いた
お客さんも人間私達も人間　気にしない気にしない
あれから何年たったのかなぁ
あの時の貴女の笑顔
今でも私の心の中で輝いています

私が貴女の詩（うた）を聴いたのは舞台の上だった
なんて素敵な夢のある詩だろう私には書けない
貴女の詩に感動して　リハーサルから自信喪失
そんな私の耳元で　貴女がソ～と囁いた
何時の日か私を越えるはず　だから自信をもって
あれから何年たったのかなぁ
あの時の貴女の優しさ
今でも私の心の中で輝いています

私が貴女の訃報を知ったのは　6 月だった
まさかね　そんなこと　同姓同名だよ　きっと
涙がこぼれ落ちないように　空を見上げた
梅雨空に綺麗な虹　虹の向こうから貴女の声
泣かない泣かない　私はここに居るよ
どれほど時間が経っても
貴女の事を思うと
今でも心の中は涙で一杯になります

貴女の笑顔も貴女の優しさも　貴女の生き方そのもの
貴女の生き方は決して真似出来ないけれど
私は私の生き方をしよう
貴女に貰った沢山の勇気と沢山の感動を力に変えて

✤作詩者の思い✤
（故）納さんの訃報を新聞で知ったとき「まさか同姓同名だよね」と信じられませんでした。市民文化ホールの楽屋で何度がご一緒させていただいて、楽しいおしゃべりも沢山しました。
あの優しい笑顔を思い出しながら、この詩を作りました。
詩の中身より題名に 1 番悩みました。「追憶」にしたのは、私が納さんの事を忘れないように…と誰かの心の中で納さんが生き続けてほしいとの願いを込めました。